

内的本質であり、祖国アテネの正義に通じるものであった。家永氏のたましひをそれに比するのは大げさだというなら、国民の正当な教育要求に合致する精神といってもよい。歴史をつらぬく必然性も、とどのつまりは個人の主体的な要求と行動をとおして現われるほかになく、それゆえに雑多な諸要因によって一時的な屈折を余儀なくされることはあっても、その本来の流れを変えてしまうことはない。

教育の専門性は、国民の教育要求に奉

仕しつつ、これを歴史の本流につなぐところに成り立つといえよう。従ってそれは歴史の認識と不可分である。大学とはなにか？そしてそこでの研究とは？教育とは？という問題は断えず問いなおされねばならぬことであるが、とりわけ今日、それを国民とともに組織的に、自覚的に考えるべき時点にいたっている。共同の努力による国民的な連帯の精神、それこそ大学によって立つ研究と教育の根底であると考えられる。

## 地理学野外実習について

内 山 幸 久

地域科学としての性格を持つ地理学では、当然のことながら所定の地域がいかなる状態にあるかを知ることが一つの重要な課題となっている。それ故、地域調査は地理学研究の上で欠くことのできないものである。このようなことから、本学教育学部地理学教室では教官3人が授業の一環として3年生を対象にして夏休みの始めの1週間に地域調査のための野外実習を行なっている。

野外実習対象地域は昨年（昭和48年）が粟島、志々島、今年（昭和49年）が庵治町というように毎年変わっている。野外実習のための準備はこの対象地域の選定から始められる。4月頃から香川県内で地理学上研究対象地域となりうる地域を探すのであるが、これが我々教官にとって重要な仕事であり、かつ大変な仕事である。その後、6月に調査項目の作成に入り、またアンケート用紙作成にとりかかる。調査項目は、地形、地下水をはじめ、農林水産業、鉱工

業、商業、都市化の問題、生活環境についてなど広範囲にわたる。アンケート項目はそれらの項目に沿って作成されるため、限られた紙面内に納めるのに苦勞する。一方学生は各自の興味にあった項目を選んでその予備調査を開始する。

今年の野外実習は7月10日から1週間であった。この間、教官と3年生全員は合宿して調査を行なった。普通地理学教室での野外実習は、毎年、各世帯に配布したアンケート用紙の回収をまず最初に行ない、次に各学生がそれぞれ選定した項目に従って聞き取り調査をし、関係各機関で資料を収集するという形で行なわれる。また、夜は夕食の後に演習を開き、各学生が調査してきたことについて発表、討論がなされ、翌日の予定について検討がなされる。毎年、7月中旬というところと梅雨がのびると雨中での調査となり、また梅雨明けだと夏のカンカン照りの中での調査となりいずれにしても相当の体力と気力を要する。そして本学部

全体がそうであるように、地理学教室の学生も半分以上が女性で占められる。女子学生は聞き取り調査やアンケート用紙回収に男子学生以上の苦勞があるようである。また、野外での活動が中心であるため、女子学生は日焼けをしないように苦勞するという。さらに我々教官も学生に事故がないように気を配らねばならない。現地調査が終るころは教官、学生ともグッタリという感じになる。

現地での調査が終った後に、夏休みにかけて回収したアンケートおよび資料の整理がなされる。その後、9月以降の演習で、各学生が自分の調査した項目について発表し、討論がなされる。そして11月頃に発表会を開き、論文の形にする。さらに冬休みに原稿を作成し印刷になるのが2月である。このように、野外実習についてはその

準備期間と整理期間を含めてほぼ一年かかるわけである。

地理学研究において野外調査が重要な部分を占めることは最初に述べたが、地理学野外実習に対する学生の反応をみると次のようである。すなわち、高校時代まで地理が好きであったという学生の多くは、地図を見ることが好きであったり、見知らぬ土地に思いをよせることが好きであったり、さらには地名その他の地理的事象をおぼえることが好きであったりする者が多いようである。これらの学生の多くは今までの地理とは全く異なった野外実習に非常な苦痛を感じているようである。しかし、本学部地理学教室の授業の一環として長い伝統につちかわれているこの地理学野外実習に対して、多くの学生が一生懸命に取り組んでいる様子には感心させられる。

## 他力依存と模倣主義

小 林 立

近頃「物価」と「教育」について論議が盛んである。そこには共通の性格があるように思う。他力依存と模倣主義である。

物価暴騰の根底には企業の借金主義がある。しかも通貨の増発によって金利負担の軽減をはかる。過剰流動性とかいう単語を創造し国民一人一人にインフレを均分する。

日本の教育はつめ込み主義であると早くから批判されている。そこには模倣主義がある。情報を豊かにもった人の数を増やさずすれば、よりよい生活環境がうみ出せる保証はどこにもない。日本の現状が証明

済みである。

日本ではいわゆる模倣主義が正統派である。それは質より量の拡大を重視する。GNP世界第三位、教育のつめ込み主義などの現象をとっている。しかも模倣主義は「アクセル」しかない「ブルドーザー」である。

戦後の物不足は、生産第一を正当化した。しかしそこには外資導入、技術導入という他力依存と模倣主義がある。それは経済成長のため借金の勧めとなり、高度成長へと連なる。資本も技術も借り物なら、原材料すら外国に依存している。それでもなお